

寄稿

ロバート・バトラー教授を偲んで

祖父江逸郎

Itsuro Sofue

名古屋大学名誉教授・愛知医科大学名誉教授
長寿科学振興財団理事長

ロバート・バトラー教授は、早くから高齢者問題に取り組み、パイオニアとしてアメリカを拠点にグローバルな活躍しておられることはよく知られています。1993年ベセスダで開催された「高齢化に関する日米合同委員会」でお目にかかることができ、すばらしい発言などリーダー的存在がクローズアップされていました。アメリカでは、高齢者は弱者で、社会のお荷物であるとの考えが支配しているのを一掃、新しい高齢者像として、社会での役割、使命、生き方などプロダクティブ・エイジングの重要性を強調、長寿社会での高齢者の立場、存在意義を明らかにし、提唱されたことは、多くの人々から高く評価されています。

拙著『長寿を科学する』で、バトラー教授のプロダクティブ・エイジングを紹介させていただきましたが、高齢者自身の尊厳の保持、生活と長寿におけるQOLの改善をめざし、積極的に社会に参加、かかわりを持ちつづけることは重要で、多

くの共感を得ています。わが国でも、長寿社会をめぐる諸問題が取り上げられ、国立長寿医療研究センターの設立が実現しました。活発な論議の中、愛知県でも国際長寿シンポを1988年以来開催、1997年第10回シンポで、バトラー教授をお招きし、「長寿社会におけるQOL」の論題で、特別講演をしていただき、論場の聴衆に深い感銘を与えられたこと、その折の先生との楽しい懇談、ご指導など懐かしく思い出されます。

教授はILC-USAを設立、ILC-Japanなど世界各国をつないで活躍を展開、その信念と情熱には心から敬服する次第です。長寿時代の先駆的リーダー、バトラー教授の急逝は誠に残念至極、世界的にも大きな損失です。さらなるご活躍、ご指導を期待していただけに悲しみは大きく痛恨の極みです。先生のご逝去を悼み心からご冥福をお祈りいたします。



1993年、高齢化に関する日米合同委員会での博士(前列右から3人目)と筆者(前列左から2人目)